

序

一般に生物界において同種の個体に対する働きかけをコミュニケーションと言い、その手段はさまざまである。人類は他の動物に例を見ない言語を持ち得ることによって高度なコミュニケーションを可能とし、今日の文明を築き上げたものと言える。

言語は一つの記号であり、それが文字として記述されるようになって人類のコミュニケーションは個体間に留まらず、その対象は拡がり、さらに距離と時間を越えたものとして発展した。人類は言語により、ものを考え思想を伝える術を覚えることによって、知識を蓄積して行った。

こうして言語は物事に対する共通な理解を深める有効な手段ではあったが、なお言語を尽くしても語り得ないことは余りに多い。「これだけ言っても分かってくれないのか」といった憤りとか、感極まって「言うべき言葉も知らない」ことは日常よく体験することである。「これ以上、言語では説明し切れない」ことのあるのは当然であり、この場合「言語の道は断たれた」として「言語道断」の概念が生まれる。

研究とは元来、不明な事象を解明し、そこに何らかの客観的な安心を求める行為と考えてよからう。そこでは、さまざまな言語が目的に応じて使われることになる。複雑な事象を説明するには、異なる言語を適切に活用する必要がある。たとえば、技術に関する研究では数学や物理学、化学などは基礎的な言語であり、コンピュータ言語や日常言語は数多く使えるほど、発想も表現も豊かになることは間違いない。逆説的に言えば、ある事象を説明するのに最も適した言語を創造することを研究といってよい。しかし研究は、どのようなすぐれた言語を使おうとも、説明し得るのは、遂にその言語の範囲内にあることを研究者は謙虚にうけとめるべきであろうし、言語道断の現象に目を背けてはならないと思う。

1983年4月

清水建設株式会社研究所長

工学博士 太田利彦